



意義深い国際舞台での市民参加

愛・地球博は、世界で初めて環境をテーマにした博覧会でした。そのメッセージを受け継ぎ、新たに名古屋でCOP10を成功させた。どちらにも関わった当事者のひとりとして、実に感慨深いものがあります。

CO10で重視したいのは、市民参加が根付いたことです。今回の政府提案は、市民ネットワークの提案を受け、それを国際舞台に載せたもの。「里山イニシアティブ」「水田決議」「生物多様性の10年」。いずれも、そうです。

市民参加の意義を強調するのは、理由があります。産業革命の時代は地球資源が無限であることを前提にしていました。それ以降、無限の資源を科学し、技術によって繁栄に結びつけていくことが社会のテーマでした。しかしここへ来てはっきりしてきたのは、あらゆる地球資源に限界が見えてきたことです。生物多様性をもたらす生態系サービスも同様です。

そうすると科学や技術以上に、市民のライフスタイル、つまり地球の持続に対し一人ひとりどう取り組むかが大切になってきます。COP10で市民参加が重要な役割を果たしたことの意義を強調したのは、そういう背景からです。

名古屋には引き返す勇気がある

もう一つ指摘しておきたいのは、名古屋が引き返す努力をしてきたことです。例えば幕末から明治にかけて東部丘陵は禿げ山になりました。焼き物の陶土採掘や、人口急増に対応するためです。

環境革命に対応した まちづくりへ 早くカジを切り、 ゆっくり進もう



中部大学応用生物学部 教授
COP10支援実行委員会 アドバイザー
涌井史郎さん

わくい しろう／昭和20年、鎌倉市生。東京農業大学農学部造園学科出身。桐蔭横浜大学医用工学部特任教授。愛・地球博会場演出総合プロデューサー、環境省生物多様性広報・参画推進委員会座長、国連地球いきもの委員会委員長代行、他。

これを100年かけ回復させた場所が海上の森です。当初の万博計画では主会場を海上の森につくり、跡地に住宅団地を開発する予定でした。しかし市民の力で方向転換させました。藤前干潟のゴミ処分場計画を中止させたのも市民パワーです。それに伴いゴミ分別の先端的な取り組みも始めた。

名古屋の市民、行政には行き過ぎを反省し引き返す勇気がある。その名古屋でCOP10が開催されたことにも大きな意義を感じます。

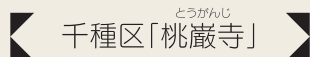
生き物に学ぶ「ものづくり」「まちづくり」

このさき地下資源が払底する時代に、われわれはどう生きていいのか。生き物に学ぶことです。46億年の地球の歴史の中で、生物が38億年かけつくり上げてきた生き残りのシステム。それが、現在の科学技術のフロンティアなのです。

これまで名古屋のものづくりは、産業革命の最先端を担った自動車を中心でした。しかし、これからは生物資源の恩恵を活かしたものづくりへシフトせざるを得ない。それは名古屋の産業界のみならず、すでにご存知で、中部経済連合会は「生物多様性宣言」を発表しています。

一方、まちづくりに目を向けると、名古屋はこれまで道路整備と区画整理を中心に進めてきました。その名古屋が環境革命に対応したまちづくりにカジを切れるのか。愛・地球博で環境のあるべき方向を示し、COP10で生物多様性のもたらすサービスが未来を支えるという認識ができた。次のステップは、名古屋のまちがどんな生態環境都市に変わっていくかです。カジは早く切った方がいい。突然の変化は痛みも大きい。カジを早く切り、痛みを伴わないようゆるやかに変わっていくことが必要です。

私のお気に入りの場所



千種区「桃巖寺」

広小路通の本山交差点の南へ四谷通を5分ほど歩いた所に織田信長の父、信秀の菩提寺「桃巖寺」があります。参道の楓のトンネルを通過して鐘楼門をくぐり、四季の草花が美しい手入れが行き届いた庭園を眺めた後、木々に囲まれた細い坂道を下って行くと、高さ15メートルの青銅の大仏像が目飛び込んできます。表情がとても穏やかなこの大仏像は京都で造られたそうです。また、寺では裸で横たわる、「ねわり弁天」も拝観でき、幹線道路に囲まれマンションが建ち並ぶ住宅街にあって、十分落ち着いた場所となっています。

栄公園振興株式会社
片山 卓さん

